

耕土耕心

第29号

令和4年
1月20日

編集・発行

静岡県立農林大学校
同窓会

〒438-8577
磐田市富丘678の1

電話
0538-31-7901

食料自給率について 考える

同窓会長 大原正和



新年あけましておめでとうございます。

昨年はコロナに明け、コロナに翻弄された1年でしたが、今年は感染が縮小し、多くの分野で元の生活に戻っていることと思います。改めて会員の皆様の活発な事業活動や豊かな生活を願うものであります。

さて、昨年9月、国は2020年度の食料自給率がカロリーベースで37%に低下したと発表しました。自給率の低下要因はコメの消費減退及び小麦生産量の減少です。一方、生産額ベースの自給率は67%で前年度

を1ポイント上回りました。

カロリーベースの食料自給率というのは、一人一日当たり国産供給熱量(843 kcal)を一人一日当たり供給熱量(2,269 kcal)で割ったもので、食料自給率のほかに「食料国産率」という指標もあります。

この二つの指標の違いは「食料自給率」が輸入飼料で育った畜産物を反映しないことに対し、「食料国産率」はこれを反映するもの(輸入飼料に関係なく日本で育てられた畜産物)としており、「食料国産率」は46%です。なお、飼料自給率は25%で、畜産業は多くの輸入飼料に頼っているのが現状です。ちなみに、「食料自給率」の分子には輸出食料も含まれており、これはいざとなれば輸出をストップして国内消費に充てられるからという理由からだそうです。

こうした国内の食料自給状況は先進国の中でも最低で、地球規模での人口増加が食料の争奪を誘発する可能性や、伝染病の感染拡大、有事などに備えるために国内生産を維持拡大し、合わせて国民の消費行動を変えていく必要があります。私たち農業生産に関わる者としてこうした状

況を理解し、国民の生活に直接かわる農業に誇りをもって取り組んでいきたいと思えます。

開学記念式典と 学位記授与式

農林環境専門職大学学長 鈴木滋彦



時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。全国初の農林業系の専門職大学として開学して二年目を終えようとしています。この間、皆様から頂きましたご支援とご声援に感謝申し上げます。

開学初年度はともかくにも大学での運営を軌道に乗せることが仕事でした。全国初の農林業系の専門職大学として第一歩が刻まれ、専門職大

学制度そのものの知名度が低いなか、大学の理念や目標を説明することに努めました。開学当初は文部科学省に申請した事柄を約束通り、すなわち設置計画通り着実に進めることが第一義ですが、一方で、動かしみて初めてわかる「不具合」を把握する必要もあります。二年目からはこうした課題を話し合っており、将来に向けてのビジョンを提案することに取り組んでいます。

また、懸案となっていた開学記念式典を昨年11月19日に挙行することができました。県知事をはじめ、農業関係、産業界、経済界、教育界、その他関連する多くの方々のご臨席を仰ぎ盛大に開催されると同時に、オンライン配信もされ多くの皆さんに関心を持っていただけました。コロナ禍のもと開学初年度こそ断念しましたが、二年目に無事開催することができて安堵しました。大きな節目のイベントであると同時に、これから始まる大学の長い歴史を考えたとき、開学10周年、20周年、あるいは50周年などの時期に大学開設の思いを振り返って頂くためにも、開学に携わった者が行っておくべきことの一つと考えておりました。

さて、本年3月には大学としては初めての学位記授与式を行い、短期大学の第一期生を送り出すこととなります。このたび卒業する皆さんは「一期生」という看板を背負って世の中に出ますので、注目を浴びることになると思いますが、専門職大学の誇りをもって進んでほしいと

願っています。同窓会の皆様におかれましては、卒業生を温かく迎え入れていただき、また励ましていただければと思います。
今後とも宜しくご指導賜りますようお願い申し上げます。

壬寅に寄せて

農林大学校長兼
農林環境専門職大学事務局長

井口真彦



前身を含め百二十年以上の歴史を有する農林大学校が、本年、その幕を下ろすこととなりました。

本年、令和四年は「壬寅」（みずのえとら）の年。「壬」には「陽氣を下に妊（はら）む」、「寅」には「春の草木が生ずる」という意味があり、芽吹き、そして新しい成長がイメージされます。

この春は、農林大学校研究部の最後の卒業生とともに、後継として二年前に産声を上げた農林環境専門職大学、同短期大学のうち、後者が初めての卒業生を世に出すことにな

ります。

農林大学校で学び、共に過ごした皆様の多くは、既に県内外の農林業の場などで活躍され、輝かしい実績を残されています。

同じ「耕土耕心」を胸に、この地で芽吹き、先輩方の後を追って成長していく若者たちを、地域の皆様、同窓生の皆様とともに祝福し、見守っていただけることに農林大学校の最後の校長、専門職大学の最初の事務局長として、この上ない幸せを感じております。

今後とも、皆様の一層の御理解と御支援をお願いいたします。



《学校の話題》 農林環境専門職大学の 施設整備について

専門職大学 総務企画課

令和2年4月に開学した農林環境専門職大学ですが、早いもので、短期大学部においてはあと数ヶ月で最初の卒業生が羽ばたこうとしています。そんな中、農林大学校から専門職大学への移行に係る施設整備についても、順調に進んでいます。

令和3年4月からは、新校舎（通称C棟、3階建、3,238㎡）が供用開始となりました。新校舎には、パソコンを用いた最先端の講義を行う情報処理室や、多種多様な研究ニーズに対応できる実験室（2部屋）、ミーティングルーム等があります。また、螺旋階段が特徴的な図書館や、吹抜け構造の開放的な学生食堂が新たにオープンしています。食堂は、ランチの時間帯（11時30分～13時30分）については学生だけでなく、教職員や一般の方も利用可能となっております。4種類のメニュー（定食2、麺類1、丼1）が常に用意されています。本学で収穫した農産物を使用した「アグリフォーレメニユー」も定期的に提供しており、地域の方々に農林業及び本学の魅力を発信しています。卒業生の皆様方におかれましても、本学にお越しの際は、ぜひ食堂にもお立ち寄りください。

そのほか、特徴的な部分としましては、1階部分には高床式倉庫をイメージしたピロティ空間が設けられており、農産物の販売実習等が開催されています。外壁には太陽の光を適度に取り入れられる静岡県産の木製ルーバーが設置されています。

現在は、既存男子寮の老朽化や女子学生の増加に対応するため、新学生寮の建設が行われており、工事も大詰めとなっています（令和4年4月供用開始予定、3階建、定員200名、2人部屋）。従来どおり

大学、短大ともに1年生は原則全寮

制となっています。なお、新学生寮は、大学から市道を挟んだ北側に位置しますが、大学敷地と新学生寮の間には新たに歩道橋が設置されるため、学生が公道を通ることなく、安全に往来が出来ることとなります。また、静岡文化芸術大学の学生の皆様には、本校舎改修、新校舎建設に引き続き、共同研究という形で、デザイン性に富んだ魅力ある施設づくりに御協力いただいております。

令和4年度以降には、旧男子寮の解体及び跡地整備、既存女子寮の改修等も予定しており、今まで以上に職員一同、素晴らしい大学になるよう邁進していきたいと考えています。関係する皆様におかれましては、引き続き、温かい御支援をお願いいたします。



学生生活について

専門職大学 学生課

今年度は新入生百二十名が入学。二年生百三名と合わせて、二百二十三名が在学し、充実した学生生活を送っています。

今年度も入学式や大学祭等の行事



を規模縮小して開催するなど、新型コロナウイルス感染症の影響は依然としてあるものの、学生寮や体育館から聞こえてくる学生の笑い声や、圍場で汗を流し懸命に実習に取り組む学生の姿を見ると、昨年よりもより大学生らしい生活が戻ってきたのではないかと感じております。

今年には合唱、バドミントン、バスケットボールなど、十一サークルが結成されました。サポテン・多肉植物研究会や花卉サークルといった、農林業系の大学ならではのサークルも発足し、元気に活動しています。

そして今年も企業実習において、多くの農林業法人、関連企業、農家の皆様方に短期大学部学生を受け入れて頂きました。コロナ禍の中で例年と変わらず御対応頂きましたことをこの場を借りて御礼申し上げます。

今年度、短期大学部からは専門職大学に移行して初めての卒業生が社会に旅立っていきます。寮生活を通して培った社会性やコミュニケーション能力と座学や実習等で身に付けた現場力を、農林業現場で大いに発揮してくれることを期待しております。

今後も学生生活を学生課一同全力でサポートしてまいります。皆様方におかれましても、今後も引き続き、御支援、御協力をお願い申し上げます。

《支部だより》 七夕豪雨から

中部支部長 榎本雅亮
【昭四十八農中研卒】

私は、農業講習所から農業技術及び農業経営を担う者を育成する専門機関として発足した、農業中央専門研修（技術科）三期生として昭和49年3月に卒業しました。同年4月地元JAに入組し農業技術員（指導員）などに就き、定年後はJA経営を担う役職を経験いたしました。

昭和49年を振り返ると、今では頻繁に発生しているゲリラ豪雨の先駆けであったと思う集中豪雨（七夕豪雨）が、7月7日から8日にかけて旧静岡市で発生。総雨量が508ミリに達し（旧静岡市・旧清水市で）27名が犠牲となり、家屋の倒壊や浸水被害面積は約2600haとなりました。農業では傾斜農地の崩壊、田植え後の水田やハウス野菜が長時間湛水し、収穫も見込まれない状態により、被害の大きさは計り知れませんでした。

このところ、地球上では、台風・ハリケーンの大型化、豪雨などの発

生が年々増加し、その被害規模も非常に大きなものとなっております。産業革命以来、石炭・石油などの化石燃料で経済を成長させ、農業もその恩恵を受けてきました。その結果、大気中のCO2濃度は上昇し、これが温室となり様々な異常現象を引き起こしています。この11月には世界主要国によるCOP26（国連気象変動枠組条約締結国際会議）が開催され、将来に向けてCO2排出ゼロに向け議論が交わされており

農業は、自然環境条件を見極め適地適作にて生産活動を行い、それに加え化石製品等の使用により拡大し、安定的に農産物を届けて来ました。それが地球温暖化により一部影響し、その結果、食料の安定生産に赤信号が灯っております。これを危惧し、今後の生産活動に対して製品等頼りによる活動を控える努力が課せられてきています。この事は、これまでの生産方式に一石を投じる非常に難しい事態ですが、品種改良、AI等利用による栽培など一新した生産方法での研究が加速され、実現する日も近づいていると思います。卒業して間もなく半世紀を迎えますが、一部で農業が見直されている事に嬉しさを感じ、同窓会員の皆さま、及び農林環境専門職大学で学ぶ学生の今後の活躍に期待をいたします。

雑感

西部支部長 松井清和
【昭四十八農中研卒】

私は、昭和49年3月に農業中央専門研修所技術科を卒業しました。研修所では専門的な学びを得たと同時に、寮生活での会話や悩み事の相談など懐かしく思い出され、今でも当時の友人が私にとって大切な存在です。

研修所を卒業して平成26年3月の退職までの40年間、県の職員として在職し農林業関係の勤務は、中部農業事務所において乳牛の脂肪分検査や園芸振興、北遠農林事務所では総務、組合検査課では農協検査の8年間です。特に農協検査では、多くの先輩や後輩の皆さんが農協に勤務しており助けていただきました。農林業関係以外では、土木事務所、情報システム課、平成15年に本県で開催した国民体育大会の運営などに従事しました。

退職後は、私が市民ランナーとして多くの大会に出場できたということもあり、その恩返しのため日本で陸上競技連盟公認審判員として活動し、現在は静岡陸上競技協会副理事長として大会運営に携わっています。

さて、農業中央専門研修所は時代に即して幾多の変遷を経ながら農林大学校、そして文部科学省所管の農林環境専門職大学・同短期大学部と改変されました。しかし、建学の教育理念である「耕土耕心」は引き継がれていると聞き嬉しく思っています。

農業を取り巻く状況は、就業者数や農地面積の減少、加えて大規模な自然災害や家畜疾病の発生、新たな感染症の発生などによる影響が懸念されています。しかし、農政改革の推進により農業所得が増加傾向にあり、若者の新規就農が増加するなど成果が現れてきています。このような動向を踏まえ、さらなる農林業の発展を願い、同窓生として微力ながら応援していきたいと思っております。

《若手会員紹介》 未来ある若者のために

佐藤 匠
【令元農林大卒】

農林大学校で農業を学んでいくうちに、私と同じように農業に興味を持ち、学びたいと考える若者が減少してきている現状を知りました。そのことを知ったとき、より多くの若者に自分の好きな農業について知ってもらいたい。そう考えた私は、農業実習助手という道を目指し、歩み始めました。

農林大学校を卒業後、試験に合格した私は、静岡県立藤枝北高等学校で実習助手として働き始めました。就職後2度目の冬を迎えた今、少しずつ仕事にも慣れ、生徒への接し方、伝え方にもひと工夫加えられるようになりました。

就職してすぐ、新型コロナウイルス

の影響によりほとんど授業がない日々が続きました。

私が担当していた授業では、1人1株スイカの栽培を行います。学校の授業日数は変更できないため、それに合わせて栽培計画を立てなければなりません。そのため、生徒が学校に戻ってくるまで、2000人分のスイカを2人で管理しなくてはなりません。無事に学校が再開した時、それぞれが担当するスイカの管理のために、朝早くから観察を行っていました。生長も進み、無事収穫できた時の生徒の笑顔を見た私は、改めてこの職に誇りとやりがいを感じました。

今年4月から通常日課での授業となり、スイカの定植から教えることができました。

どの授業でも生徒一人ひとりに対して丁寧な指導を心掛けて指導を行っています。まだまだ未熟な私ですが、より多くの人々に農業の良さを伝えていくため、今後も日々努力していきたいと考えています。



地元の農家を支える

三田穂波
【平三十農林大卒】

わたしは非農家ですが、幼い頃、祖母の畑作業を手伝うことが楽しくて、農業に惹かれました。静岡県立静岡農業高等学校で3年間学んだ後、静岡県立農林大学校へ入学しました。

高校生の頃、わたしが住む清水区には、バラの生産者が多く「しみずのバラ」は全国的に有名だと知り、しみずのバラについてもっと知りたいたいと思いました。同時に、地元の農家を支える仕事がしたいと思うようになりました。

農林大学校では、花きコースの切花専攻で2年間栽培について学びました。2カ月間の先進経営研修では、しみずのバラ農家堀池様にお世話になり、採花から出荷までの流れや、バラ部会の活動について多くのことを教えていただきました。

卒業後、JAしみずに入組し、ありがたいことに、しみずのバラの指導・販売担当をしております。

現在、しみずのバラ部会員は17名で、およそ70品種ほどのバラを栽培しております。出荷量は年間およそ230万本で、京浜市場や地元市場に出荷しています。「すべてはお客様の感動のために」をスローガンに掲げ、部会員一人ひとりが、共同販売という意識を高くもっていること

から、しみずのバラは品質がよく、どの市場からも信頼されていると感じます。

入組してから3年が経とうとしておりますが、指導担当といっても、生産者の知識・技術から学ぶことばかりの毎日です。圃場巡回を通して、ハウス内を確認し、病害虫の発生や管理方法について気付いたことがあったら、生産者に報告することで、生産量・品質向上に繋がるよう取り組んでおります。

農林大学校で学んだ栽培の基礎知識や、研修を通して農家さんから教えていただいたことを生かし、今後もしみずの花を盛り上げていけるよう頑張ります。また、農林大学校でお世話になった先生方や、卒業後、農業に携わる仕事をしている同級生と、農業についての情報を共有できると感じています。

今後もしみずのバラを多くのみなさんに知ってもらいたい、農家さんを支えていけるよう頑張ります。



《事務局からのお願い》

住所変更、訃報等は、各支部長又は支部役員まで連絡をお願いします。